第24回椹野川河口域・干潟自然再生協議会会議の要旨

１　日時

平成30年4月28日(土) 9:00～10:30

２　場所

山口市秋穂二島437(旧山口県漁業協同組合山口支店 2F)

３　出席者

別紙出席者名簿のとおり。
計54人(委員41人、委員外13人)

５　概要

(1)　第8期協議会委員・会長等の選任

・本年度から第8期委員による活動が開始(任期：平成30年4月1日から平成32年3月31日まで)。
・委員数は59名。6名から新規委員の応募があった。
個人委員：今村 主税 氏(山口県立大学)、恩田 浩幸 氏(環境ネットワークいわくに)、白水 元 氏(山口大学)、山野 元 氏((一財)山口県環境保全事業団：元県環境生活部次長)、山村 秀明 氏(元市環境政策課)
行政機関：山口県環境保健センター
・会長に浮田 正夫 氏が就任。

(2)　議事等

①　会長挨拶

・本協議会は、本年度で設立15年目を迎え、これから2年間は第8期委員での活動となる。
・平成28年度から取り組んでいる環境省事業も最後の年となり、協議会の転機になる年と思う。団体の自立を進めるため、前回の会議で設立した募金も概ね順調に展開されている。皆様の積極的な御協力をお願いする。
・本日は、水産大学校の須田教授のつながりで、中津干潟の環境保全活動等に熱心に取り組まれている「NPO法人水辺に遊ぶ会」の足利様にお越しいただいている。後程、活動の御紹介をいただける。

②　平成29年度活動報告について　…資料1

・前回の会議資料(素案)に、活動の成果指標のまとめ、学術研究等の発表や講演等の一覧等を追記。

③　地域循環共生圏構築事業について

●　事業概要　…資料2-1

・事業の目的は、実証地域における①プラットフォームづくり、②経済的仕組みづくり、人材育成を通じて、地域の環境・経済・社会の各課題の統合的解決の糸口をみつけること。また、労働力とお金をつぎ込む保全活動から、保全活動と経済活動が循環する仕組みをつくること。

・環境省は、10 の実証地域の取組を通じて生じた課題等を整理し、他地域での地域循環共生圏の構築に向けたガイドラインの作成、施策等の提案等を行う。

● **平成 30 年度の活動計画概要　…資料 2-1**

・プラットフォームづくり：協議会の継続・発展。募金等の新たな取組に係る団体等(企業、金融機関、教育機関等)との連携促進を図る。

・経済的仕組みづくり：ふしの干潟いきもの募金を土台として、アサリを活用した寄付金の獲得の仕組みを持続させるため、アサリ再生活動や調査研究等の推進を図る。また、企業等と連携した寄付付き商品の開発等も進める。

・人材育成:ふしの干潟ファンクラブ等を活用し、活動の主体となる人材の確保、活動の共感者の増加を図る取組を促進する。

● **ふしの干潟いきもの募金　…資料 2-2**

・募金の運用の流れ、各組織の役割は資料のとおり。

・管理運営マニュアル、個人情報保護方針を作成。

・募金委員会は募金の運用に重要な組織となるため、委員の決定については、募金を試験的に運用してから改めて決定。

● **ふしの干潟ファンクラブ　…資料 2-3**

・4 月 27 日時点で 17 名が登録。

④ **平成 30 年度活動計画について　…資料 3、干潟再生活動の配布資料**

・干潟再生活動(4 月)、あさり姫プロジェクト(6 月)、KRY 海と日本プロジェクト(6 月)、TOYOTA SOCIAL FES(7 月)、カブトガニ生息調査(8 月)等が実施される。

(3) **講演**

演題：中津干潟の保全活動

講師：NPO 法人水辺に遊ぶ会 理事長 足利 由紀子 氏

・中津干潟は、大分県と福岡県の県境に位置する 1,350ha の広大な干潟で、生物多様性も高い。しかし、私たちが活動を始めた 20 年前は、干潟に関心を持つ市民はほとんどおらず、調査や保全活動もほとんど行われていなかった。

・椹野川河口干潟と同じような生き物が生息し、カブトガニが活動のシンボルとなっている。ズグロカモメは冬に 100～150 羽が飛来。ハマシギは 3,000～5,000 羽が飛来し、国内で 2 番目に飛来数が多い地域と言われている。アオギス、スナメリ等の希少な動物も生息している。

・1999 年の夏に中津干潟でカブトガニを見たことをきっかけに、この感動を子どもたちにも伝えたいと思い、活動を開始した。

・啓発活動を中心に行っており、年間 30 校の小中学校に対して干潟観察会等を実施している。また、生物の目録づくり、カブトガニ生息調査、地形調査、海岸清掃、松林の景観再生、昔の漁業風景の写真の保存、土木行政と連携した護岸整備の検討等も実施している。

・生物調査で同定できたのは 800 種で、うち 3 割は希少種であることがわかった。

・初めは漁師の理解を得られなかったが、たこつぼを使った環境学習会の実施を機に連携が始まった。その後、海苔すき等の漁業体験も行っている。

・地産地消の促進、子どもたちへの環境学習、後継者の確保を目標に活動を継続している。